

の応募を期待したい。

昨年6月28日、日本学術会議において、物理学研究連絡委員会学協会懇談会がひらかれた。会長と渉外幹事が出席し、学術会議や研連の現状や科研費審査委員の選考などについて意見交換した。本学会はまた学術会議会員の選出に係る学術研究団体に登録されている。他学協会との連携をより強めていくことが必要であると考えている。

一昨年8月上旬前会長から文部大臣宛に提出していた「真空紫外・軟X線放射光施設整備に関する要望

書」のその後として、昨年1月「真空紫外・軟X線領域第3世代高輝度放射光源に関する検討会」を開いた。この件は、現在も流動的に推移している。

以上1999年度の経過を大まかに報告致しました。少しは、様子がわかってきたので、残りの1年を一生懸命頑張りたいと思います。会員の皆様からの、厳しく建設的なご意見と、忌憚のないご指摘をいただいて、学会のため前進していく積もりです。

1999年度幹事報告

庶務幹事のこの一年

東北大学科学計測研究所 高桑 雄二

佐藤会長から庶務幹事の依頼の電話を受けたときには、学会の仕事をよく理解しておらず、うまくこなせるか不安なままに引き受けてしまいました。当初の心配とは別にこの一年間の庶務幹事の仕事を滞りなく過ごすことができました。これもひとえに佐藤会長の御指導の下、学会事務局の多大なサポートと各幹事の方々の御協力のおかげと感謝する次第です。

日本放射光学会も1998年に創立10周年を迎え、本年度は第二段階の活動に入った時期にあたりました。この10年間で学会活動の多くの点について経験が積み重ねられ、過去の事例を参考にすることで庶務幹事の仕事をこなせることが多くあります。このことは他の幹事の方の仕事についても当てはまるのではないかと思います。このように学会活動は大きな問題もなく運営されているのですが、次の10年の展開を考えたとき、一つの曲がりかどにさしかかっているのではないかと思います。その理由は学会活動の基礎となる会員数について、最近ほぼ1000人前後で止まったままであり、とりわけ学生の会員が全体の10%以下の50-70人しかいないからです。ここ数年でSPring-8の大型放射光リングをはじめ広島大学や立命館大学などの小型放射光光源が建設されていることを考えると、それに見合っ

て会員数の増加を図るためには学会活動をいろんな点で見直しなが

ら進めていかなければならないのではないかと思います。庶務幹事としては会員の方々からの忌憚のない御意見をお寄せいただいて、来年度の活動に反映させていきたいと考えています。

今年一年を具体的に振り返ってみますと、やはり第三世代の高輝度光源の計画をめぐる動きが活発にあり、学会としてどう対応すべきかを考えさせられた大きな問題であったと思います。私個人としては、基本的には放射光学会が個別の問題の利害の判断や、計画を取り上げるのではなく、放射光をキーワードとした学問分野の発展のために、個別の利害を離れて対応していくことが困難ではあるが、必要と考えています。私も程度の差はあれ、それぞれの計画に関心を持っているため、立場を切り替えて考えなければいつも反省させられます。

前幹事の坂井先生から仕事の引き継ぎを受けるまで、庶務幹事が何であるかも知らずにこの一年間が始ったのですが、庶務幹事の仕事が調整・連絡の担当であることが分かってきました。これはインターネットで言えばサーバーのようなものなので、あまり出過ぎないようにして情報の交通整理に当たり、円滑な学会活動の推進を図りたいと思います。

1999年度幹事報告

行事幹事この一年

(財)高輝度光科学研究センター 大熊 春夫

佐藤会長から、「放射光学会の行事幹事をやってくれ」と電話をいただいたのが、ちょうど一年前。今まで年会・合同シンポにも数年に一回位の頻度でしか参加したことがなく、「私で良いのでしょうか?」と思ったのですが、大恩ある佐藤会長からの依頼とあれば断ることも出来ず、お引き受けすることになりました。

この一年で皆さんに報告出来ることは、長らく続いてきた4施設の持ち回り開催であった年会・合同シンポを第14回は広島大学で開催することになったことだと思います。これは今後4施設持ち回りを止めるということではなく、年会・合同シンポの開催に意欲的姿勢を持っているところに開催をお願いする道を開いたものであると思っています。

ところで、昨年度の行事幹事の水木さんの幹事報告を読むと、「今後、学会が主催するワークショップになにか今

までと違った工夫が必要かもしれません。次の行事幹事の大熊さんに期待します。」と書いてありました。この点では、全く期待はずれで申し訳ないのですが、この一年は年会・合同シンポの準備をするだけで終わってしまいました。折角お願いした行事委員の方々にも一度も集まってもらうことなく、一年が過ぎてしまいました。今年度は、私も多少慣れたことでもあり、2000年という区切り(何の区切りか分かりませんが?)の年でもあるので、ぜひ、何かイベントを開催したいと思っています。この一年の反省から、年度の早い段階でイベント企画をスタートさせることが重要であると考えています。そうしないと、すぐに年会・合同シンポの準備が始まってしまい、私の能力ではイベント企画まで手が回らない内に一年が終わってしまいます。2000年度の行事委員の方々、どうかご協力をお願いいたします。良いお知恵をお貸し下さい。

1999年度幹事報告

編集幹事この一年

東京大学工学系研究科 尾嶋 正治

平成10年から2年間編集幹事を担当させて頂きましたが、平成9年度副委員長時代を含めると3年間になります。この間21名の編集委員の方々に力強く支えられて何とか無事お勤めを果たせたかな、と思っています。2年間の編集方針は、1)過半数出席の編集委員会を!、2)年間6号発行を!、3)原稿の長期的編集企画を!、4)読者の意見を取り入れた記事を! でした。この中で、編集委員会については毎回約2/3の出席があり、私としても大変充実した楽しい委員会になったと考えています。年間6号発行につきましては、私の根回しの下手さもあって、うまく浸透しませんでした。ほとんど経費は変わらずに年6号発行できる、ことをもっとアピールすればよかった、と反省しています。長期的編集企画についてはかなり目途

がつかしました。是非継続して頂ければと思っています。また、肝心の記事についてですが、Munroさん、Agrenさんを含めて5人の外国の方に面白い記事を執筆して頂きました。また、「朝まで生テレビ」はやりたかった企画でしたので、かなり気合いを入れて実施いたしました。他にも自分で書きたい、投稿したい、という記事が5つ以上あって、勢いのある内容になったと思っています。なお、一番気にしていた発行日厳守! は事務局二瓶さんのご尽力により何とか守れました。

2年間、本当にお世話になりました。平成12年度からは兩宮さんが編集幹事に就任されます。今後とも是非、よろしく願いいたします。

1999年度幹事報告

渉外幹事この一年

分子科学研究所 鎌田 雅夫

この1年を振り返っての報告を書くことになって、今更ながら時の経過の早さに比べ、出来なかったことの多さと学会活動の大変さを感じています。1999年の放射光学会で報告した活動方針は、1)他団体が開催する行事への協賛や後援、2)放射光学会と他の団体との共同主催で国際会議を開く、3)分科会構想については今後の展開を見ながら必要なら検討する、4)学術会議などでの放射光学会の地位向上を計る、5)その他渉外(障害?)事項が発生すれば、ケースバイケースで対応する、というものでした。

この内、1)については、実に多くの他の学会や団体から協賛や後援依頼が舞い込み、放射光ならびに放射光学会が広く認知されつつあることを身をもって知ることが出来ました。これも会員各位が色々の分野で活躍されているお陰と感謝しております。2)については、第11回XAFS国際会議を2000年7月にSPRING-8と放射光学会の共同主催で行うことが本決まりになりましたが、すでに上坪前会長と宇理須前渉外幹事の段階で整備されていたお陰でした。国際会議を企画される際に、放射光学会と共同主催にする

と科研費の申請が出来るメリットが有りますので、是非ご一報下さるようお願いします。3)については、39回評議員会で分科会は時期尚早との話が有った以降に問題が発生すれば対処するとのことでしたが、幸い問題もなく時が経過し、内心ホッとしています。4)については、日本学術会議から懇談会のお誘いを頂き、佐藤会長と共に出席しました。お陰で、学術会議そのものが行財政改革の嵐の中で変革を迫られていることや、放射光学会は他の学会と比べて決して引けを取らないだけの実績を持っていることなどを、認識することが出来ました。詳細については放射光学会誌の9月号に記事が有りますので参考にして頂ければ幸いです。5)については、特に渉外(障害?)となる事項が発生しなかったため、暇にしていれば渉外幹事の仕事は無く済むことでは有りましたが、放射光学会そのものの将来を考えた場合に会員の現在の加入状況は不十分ではないかという点が幹事会で議論になり、検討することになりました。会員増問題は、皆さんの英知とご協力を得るべき懸案事項と存じますので、宜しくお願いします。

1999年度幹事報告

会計幹事この一年

高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所 山本 樹

今年で会計担当も三年目になりました。佐藤会長から、学会財政基盤の整備を上坪前会長に引き続き最重点事項の一つに掲げるので、継続性を持って努力するようにとのご指示を受けたためです。再び気の抜けない一年間となりました。

'97および'98会計年度の2年間で、学会財政に関する事柄は全て一般会計の枠内で処理できるようになった等、この問題には一応規則上の整理がついたと考えています。そこで本年の目標は、この規則を上手く運用して学会財政がさらに安定するよう努力することとしました。実際問題として一番重要な事柄は、年会・合同シンポ開催における財政責任を如何に果たすかということになるでしょう。この問題に対しては、大熊組織委員長(=行事幹事)のもとで実行委員会と良く摺り合わせを行うことで、常に献身的努力を惜しまないワーズ社への事務経費支払い等というこれまではなかった支出項目を計上しつつも黒字基調の年会運営を行うシステムを作り上げることによって、一つの答えを出すことができたと考えております。

一般会計における財源確保は、常に考え続けなければな

らない頭の痛い事柄です。本年はこの問題を少しでも好転させるために、購読会員の勧誘を積極的に試みました。本学会評議員の皆さんの協力・強力な働きかけを得て、努力は徐々にですが実を結びつつあります。学会運営が正会員年会費によって行われるというのが、おそらく本学会のような学術団体の本旨でしょうから、これからも会員の積極的勧誘は非常に大切なことと考えます。この会員数拡大については、会員の皆さんの御協力を得てさらに進めたいと思います。

会員問題としては、'98年末から'99年初めにかけて、学会外部の組織から会員名簿を使用させて欲しいという依頼がありました。これまで本学会にはこの様な事例への対応例がなかったのですが、会員自身の名簿利用の容易さを確保しつつ、学会の最重要資産とも言うべき会員の個人情報の安易な流出を防ぐことを目的とした規則を、幹事会での議論および評議員会での審議を経て、「評議員会申し合わせ」という形で作ることができました。この件については、別の機会に詳しく報告したいと思っております。

では2000年もよろしくお願いたします。